

2. 事業の概要と成果	
(1) 上位目標	マンダレー地域、ネーピードー連邦直轄領、ヤンゴン地域において、耕運機等の普及により農民の生計が向上する。
(2) 事業内容	(ア) 共同購入・共同利用のための農家グループの組織化 2月の初めプロジェクトを開始するにあたって、もっとも優先したことは雨期の始まる前に(田植えの前)、米の生産性向上指導を終え、農家が田植えに備えて施肥ができるようにすることだった。IDACAもその対応に十分な時間を取り、ワークショップの開催と各村での農業技術指導に重点を置いた。新しい農業技術は農業収入に直結するので農民たちの関心は高かったが、農民グループを組織して貯蓄活動や農機の共同購入への取り組みを同時に進めることが難しかった。 (イ) ワークショップの開催 ① 農業技術指導ワークショップ 日時：4月4日(土)～11日(土)、参加者：約350人 小祝氏とIDACAチームによって各村を巡回し、実際に土壌分析して土地の状況と問題点を農民たちと話し合った。このワークショップが各村の土壌と地域の営農の課題を明らかにした。それがその後の村人とIDACAプロジェクトにとっての地域的課題の基本となっている。 ② 農業機械化ワークショップの参加 日時：6月9日(火)、場所：ネピドー 協同組合省主催のワークショップにIDACAが招待され、Wundwin、Twentayの農民と参加したが、農民たちは協同組合省関係者や農機販売会社、そして他の農民たちとの情報交換により、農機ローンや自分たちが選択したい機種やメーカーの情報収集に大いに役立っている。 ③ 貯蓄ワークショップの開催 日時：6月29日(月)～30日(火) 場所：Thayetar村 専門家を招聘して開催し、農民のグループづくりと貯蓄活動への取り組みについて学習し、3つの貯蓄グループ(メンバー合計46人(うち女性が23人))が誕生し、活動を開始した。 この研修をもとにIDACAは自前の研修をTwentayの村で行い2つの貯蓄グループ(メンバー合計23人(うち女10人))が誕生し、貯蓄活動に取り組んでいる。 (ウ) 耕運機等の共同購入・共同利用 耕運機等の共同購入・共同利用を達成するための前提条件となる貯蓄グループの組成と活動開始および米の生産性向上のための適正技術の普及がプロジェクト初年度の事業内容の中心となる。 (エ) 本邦研修の実施 ① 本邦研修参加者を対象とした協同組合ワークショップの開催 本邦研修(8月22日～8月30日)に参加する農民たち(Twantay

4名、Wundwin 4名)を対象に、現地ミャンマーで日本の農協についての基本的知識を学ぶ協同組合ワークショップを8月5日から7日まで、ネピドーで開き、協同組合関係者を含め合計約30人が参加する予定である。

(オ) 米の生産性向上指導

① 土壌分析器を用いた米の単収向上ワークショップの開催

日時：3月31日(火)～4月2日(木)

場所：ネピドー、ロイヤル・ロータス・ホテル、

参加者：26名

(株) ジャパンバイオフィーム代表・栽培コンサルタントの小祝正明氏を招いてのワークショップは理論だけでなく、各村から採取した土を使って実践的な指導もあり、参加した農民だけでなく、政府関係者、イエジン農業大学、農業研究所の農業技術専門家にとっても、大変貴重な機会だった。

② 農業技術指導フォローアップのための各村巡回

日時：4月28日(火)～5月4日(月)

操作が簡単で作業時間の短縮と無駄な種を蒔く費用を節約できる手押し式「種まきごんべえ」(日本製)を各村に紹介し、操作実習を行い、共同利用のルールを作って有効に活用するように貸与し、各村での活用を促した。同時に、日本からミャンマーに適すると思われる種子の紹介したが、Tatkonの農民リーダーが種まきごんべえを使って、日本産トウモロコシの種を約0.6ヘクタール播いたが、7月の時点でそれが背丈以上に伸びて、収穫が期待される。IDACAは収穫後、この種子を他の農家に配布する予定である。ちなみに、7月末現在、種まきごんべえには農民からすでに3台の注文があった。

③ 実験圃場の設置

Twantayの村とWudwinの村で設置し、定期的な観察を行っている。

(カ) JICAのWater Saving and Water Harvesting Projectの視察

日時：5月1日(金)～2日(土)、参加者：25人(男12人、女13人)

乾燥地帯であるマンダレー地域のWudwinの村は土づくりとともに農業用水の確保と灌漑についての技術の導入が地域農業の最大の課題の一つであり、IDACAは農民たちとマンダレー地域、Nyaung OoタウンシップにあるJICAプロジェクトを視察した。彼らの生命線ともいえるため池を自力でつくる方法を教わった参加者の反応は驚くべきほど早く、2日後には2人の女性が自力でため池を掘りはじめ、それに賛同した男と3人で8つのため池をつくった。IDACAプロジェクトは研修やワークショップを通じて自発的に活動する農民の育成を目指しているが、この研修参加者の行動はその成果の現れである。後日談とし6月19日(金)はJICAプロジェクトから、視察にきて農民たちは大いに励まされた。

(キ) 運営委員会の開催

第1回運営委員を3月11日(水) 場所：ネピドー、ロイヤル・ロータス・ホテル、参加者：18名

第2回5月4日(月)(参加者22名、ネピドー同ホテル)

	第3回は8月7日（金）を予定 当委員は3つの村の農民リーダー2名（男女）、・フィールド・オフィサー2名（女）、各タウンシップ・地域行政、中央官庁（農業灌漑省、畜産・水産・地域開発省・協同組合省）、全国協同組合中央会等の関係者であり、農民たちにとって相互の情報交換や行政機関との連携などを議論する貴重な機会となっている。
（3）達成された効果	（ア）共同購入グループの組織化 ①2つの村での5グループが貯蓄活動に取り組んでいるが、この活動は7月から始めたので、農機購入計画をたてるまでにいたっていない。しかし、各貯蓄グループでは役員を決め、貯金日、毎回の貯金額、貯金通帳、現金出納帳の記帳などを行い活動が定着しつつある。 ②すでに、WundwinのThayetar村の1つのグループはすでに自発的な貯蓄を行っていて、農機の共同購入について積極的である。また、Twantayの女性グループは小型農機である種まきごんべえの共同購入を目的に貯蓄している。 （イ）簡易農機具の導入による農作業効率化 IDACAが貸与した種まきごんべえを活用して、0.6ヘクタールの畑に2・5時間でトウモロコシ等を播き、農作業時間の短縮と手蒔きによる種の散逸の削減を実現し、育成に成功したTatkonの農民がいる。この種まき機は比較的手ごろな価格であり、利用の簡便さと種の損失率の減少が実現できる農機であり、すでに3台は個人農家が購入予定していることは、一つの成果としてとらえることができる。 （ウ）ワークショップへの農家女性の参加 この半年で約30回の農民集会、ワークショップなどを行い、参加者は約1000人に及び、参加者の男女比が6：4であり、女性の参加率が高いのは、女性参加を積極的に進める本プロジェクトの成果である。 （エ）米の単収向上技術の普及 実験圃場を3つの村で設置することを目的としたが、7月から活動を始めたShinmakaw村の今年度の夏米の実験圃場の設置はあきらめざるを得なかったが、先行した村の実験圃場では、1か月ですでに投入した肥料による育成状況の差が現れているので、収穫時での増収が期待できる。